

待ち望む春に咲く、日本固有の花木

ツバキ  
椿



椿は日本原産の常緑広葉の花木。わが国の山野に自生するヤブツバキ(ヤマツバキ)とユキツバキの遺伝子が複雑に交じり合い、色々な種類が生まれました。一般的には、椿といえどヤブツバキをさしますが、現在、日本の椿の園芸品種は二千種類を超えと言われています。花は、一重咲き、八重咲きなどがあり、花色は、赤、白、ピンク、斑入りもあります。最近では黄色の椿も誕生するなどバラエティーにとんでいます。

古くから貴族、僧侶などに親しまれた椿は、「古事記」や、「日本書紀」にも登場し、大伴家持が天武天皇に献上したとも伝えられています。しかし、椿がいちやく注目を浴びるようになったのは、室町時代以降のこと。茶道、華道の出現が大きに関係しています。椿の葉として慎ましやかな風情は、特に茶人に好まれました。利休の僕だった佐助が、利休のために苦心して創り上げたといわれる椿「佐助」は有名で、椿はその後ますます「茶席の花」として、重要な役割を果たすようになりました。江戸時代に入ると、椿は鑑賞用として庶民からも愛される花になり、多くの品種が誕生したのもこの頃になってからです。やがて、日本の椿は宣教師カメラによってヨーロッパで紹介されました。彼の名を取って、学名ではカメラ・ジャポニカと呼ばれています。椿は欧米でも大ブームになり、品種改良が進み現在世界では六千種を超え、アメリカでは、カメラアとしてバラに並ぶほどの人気のある花になっています。椿の文字は、漢字ではなく和文字ですが、「待ち望む春」に咲く椿への思いが伝わってくるようです。

●話題

ヤノ・ベンチャー・レポート

産業界における幅広いマーケティングを手がけている矢野経済研究所ですが、同社発行のヤノ・ベンチャー・レポート(二〇〇四・四)では、企画「ベンチャー企業経営者に聞く」ページで、「老舗企業」から「伝統産業ベンチャー」へ脱皮した企業として梅栄堂を取り上げました。また、「全ては、お客様から教えてもらった。お客様の需要に合わせて技術を使う。伝統産業の『技』は守るのではなく、革新させて使うものなのだ。」伝統産業といえどもイノベーションを怠ってはならない。」という中田社長のコメントが「今月のことば」として紹介されました。

新聞雑誌各誌で「一期香」が掲載  
日経流通新聞(五月十一日)の

TREND BOXでは「部屋の残り香にしても、洋服への移り香にしても、ソフトな香りが好まれる」ということで開発され、ヒットしたお線香「二期香」が掲載されました。また、よみうり新聞(五月十四日)、雑誌日経トレンドイ等でも新しい発想のお線香として「二期香」が紹介されました。

番組インタビュー相次ぐ

コーヒーの香りのお線香「残香」のヒットに次いで、発売いたしましたイチゴの香りのお線香「二期香」について中田社長へのインタビューが相次ぎました。取材をいただいたのは、KBCラジオ【PAON(パオン)】、山口放送ラジオ【HOT ZONEおはようKRY!】、東北放送ラジオ「午後はおまかせ漢太のウキウキラジオ」など。それぞれ「残香」を発売するまでのイキサツや、

第二弾の「二期香」に関するお客様の反応などについて、企画段階でのエピソードなどをまじえてお話しさせていただきました。また、ABCラジオ「宇野ひろみのおはようパートナー」、よみ

うりテレビ「大阪ほんわかテレビ」、朝日放送テレビの「ポップ・ステップ シャンプー」でも、老舗メーカーのユニーク商品として、「残香」「二期香」が紹介されました。

●商品紹介

お部屋に春の香り、お届けします。

一期香

真っ赤に育ったイチゴの香りをお線香に閉じ込めました。

さわやかで、甘酸っぱい香りがお部屋に春を運んでくれます。

「二期香」は煙もひかえめ。日常の疲れやストレスがたまったときに、ぜひお試しください。

やさしいアロマに包まれた、極上のリラクゼーションタイムが始まります。



●標準小売価格 1,050円  
(本体価格 1,000円)